

〈特集：21世紀に向けてのレジャーの価値〉

現代における余暇の意義

松田 義幸*

The meaning of leisure in modern days

Yoshiyuki Matsuda

1 holiday、leisureの語源散策

アメリカ人に、holidayの語源について質問をしてみても、本来の意味を忘れて人が多い。holidayはゲルマン系の言葉で「holy+day」を意味している。こういうと「聖なる日」を連想するようだが、holyは古英語でhālig、ドイツ語ではheiligにあたり、英語のwholeと同語である。元々はhealth、soundの意味を持ち、健康なin good health、完全なin sound conditionといった使い方もある。キリスト教以前は、holy、wholeは「欠けていない」「健康な」「完全な」「全体の」を意味し、それが「神聖」に使われるようになったといわれている。このようにとらえるとholidayは、単なる休業日ではなく、「その人がその人本来になるための日」「心身健康になるための日」「その人が完成に向うための日」という意味が込められていたともいえる。

ところで、この世の中でなにが完全で、全体であると考えていたのか。それは自然の秩序とらえていた。自然こそは有機的統一体 Nature is a whole と受けとめていた。従って、holidayはこの自然の秩序に心身を委ねることによって完全性、全体性を取り戻す日でもあった。そのような生活が自然生活pastoral lifeである。

holidayに対立する言葉は、workdayである。私たちは普通の日をworkdayと受けとめている。しかし

このworkdayは、生産性、効率性、能率性を追求するから、労働生活はどうしても、細分化、専門化の分業になってしまう。そしてこの労働生活中心の生活を続けていると、いつか健康、完全性、全体性から遠のき、本来の人間性を喪失してしまいやすい。また、生活が機能的で便利な人工的な都市環境に依存していると、自然の秩序の完全性、全体性からも離れてしまう。

近年、日本だけでなく、高度に産業化を進めてきた国の人びとが、outdoor life、resort lifeに強い関心を寄せている。この深層を探ってみると、workdayからholidayへ、urban lifeからpastoral lifeへの呼び戻しが働いているとみてもよい。

産業化、都市化の近代化へ傾斜してから今日まで、私たち人間は、人間と自然の間を経済活動でブリッジしてきたが、自由時間の増大を背景にしながら、人間と自然の間をレジャー・文化活動でブリッジしたいと考え始めてきている。もちろん、このレジャー・文化活動には、賃金をあてにしない生きがいとしての生産活動(ex農事)も入っている。

今日leisureが、レジャー産業、レジャー・センターといった使われ方をしているが、元々はleisureはschoolを意味し、文化の価値の創造と享受を通して、自己開発self-developmentを図るプロセスをさしていた。今日的に解釈すれば、自由な心の状態contemplationで、自由学芸、自然生活、スポーツを楽しむ、その人が完成に向かうこと、全体に向うことを意味し

*筑波大学・多摩大学

(University of Tsukuba/Tama Institute)

ていたといってもよい。一般的にはレクリエーション、アミューズメント、レジャーを同じような意味で使っているが、レジャー問題をよく考えた古代ギリシアの哲学者アリストテレスは、はっきり区別した使い方をしていた。

We work (ascholia) in order to have leisure (schole)

アリストテレスの頃のギリシアでは、leisureをschole (school) といい、その否定形のascholiaをwork、business、occupationととらえている。明らかにギリシア人にとっての価値観は

schole (leisure) > ascholia (work)

であった。さらに、recreationをanapausis、amusementをpaidiaといい、ascholiaの生産性を下げないようにするための手段と考えていた。そして、そのascholiaはscholeの手段で、scholeが人生の目的で、幸福な生活と考えていた。

このようにholiday、leisureの語源散策をしてみると、今日この2つの言葉を風化させないで、元の意味・内容に戻して使った方がよい。

2 RecreationからAmusementへ、そしてLeisureへ

アメリカの社会学者のD・リースマン、D・ベルが、

これからの社会のことを脱産業社会post-industrial societyととらえ、そこでレジャー問題がクローズアップされると予測した。次にこの問題を考えてみたい。

今日社会変動を前産業社会pre-industrial society → 産業社会industrial society → 脱産業社会post-industrial societyのシナリオでとらえている。それぞれの社会で、人間はどのような生き方habitus mentalisをしてきたのか。また自由時間をどのように過してきたのか。

前産業社会—「勤勉—節約」の生き方

人類の歴史を100年の単位でとらえてみると、つい昨日まで、いくら勤勉に働いても、食べるのがやっとという生理的欲望の充足の時代であった。こういう時代には、勤勉に働いて節約をすることが生き方の基本となる。怠情を戒め、勤勉を奨励するものの方、考え方、感受性が大切にされる。「小人閑居して不善をなす」「怠情は悪徳のもとIdleness is the parent of all vice」と、洋の東西を問わず、「勤勉—節約」を奨励しなければならなかった。この考え方は、西洋についてみると、紀元前8世紀頃の「労働の日々」のヘシオドスに始まり、古代ローマのヴェルギリウス、大カトー、プロティスタンティズムのカルヴィン、「時は金なり」のベンジャミン・フランクリン、唯物史観のマルクス、レーニンへと引き継がれてきた。こういう

	社会のあり方	人々の生き方	経済理論	自由時間の過ごし方
ステージ I	前産業社会 (農産物中心)	「勤勉—節約」の 価値感	古典経済学 (invisible hand)	休息、休業、保養
ステージ II	産業社会 (モノ中心)	「所有(To have)- 消費」の価値感	近代経済学 (visible hand) Marketing to have $C=f(Y)$	休息、休業、保養 気晴らし、娯楽
ステージ III	脱産業社会 (ハイテク・ サービス中心)	「存在 (To be)- 自己開発」の価値感	Next Economy(?) Marketing to be $C=f(Y,T,V)$	休息、休業、保養 気晴らし、娯楽 創造的レジャー活動

社会変動と自由時間の過ごし方

時代、社会にあっては、自由時間は、労働の生産性、効率性、能率性を下げないようにするためのanapausis (recreation) に限られていた。

産業社会—「所有—消費」の生き方

ところが、このようなあり方、生き方が、1929年の世界恐慌を契機に変化したのである。「勤勉—節約」の生き方、古典経済学に代って出てきたのが、「所有—消費」の生き方、近代経済学、近代経営学である。重要なことは、所得を節約して貯蓄にまわすことではなく、所得を消費にまわすことである。もしも、所得が足りないならば、将来得るであろう所得をクレジットにして、play now、pay laterが望ましい。このように変化したのである。そして開発された経営システムが、mass production → mass sales → mass consumptionのmass marketingである。人びとの関心は、生理的欲望の充足から物的欲望の充足へ移ることになった。社会はこの人為的システムを導入し、長期に渡って、人びとの欲望と産業・経済の量的拡大を続けることになった。そして、人びとは、幸福とは所得を増やし、欲しい財、サービスを所有To have、消費することだと考えるようになった。こういう状況の下で、人びとの生活は「労働からレジャーへ」とはならず、「労働—消費—労働……」のサイクルにはまり込んでしまった。自由時間の過ごし方も、ビジネスにとっての市場創造機会となり、休息・休養・保養のanapausis (recreation) よりも、気晴し・娯楽のpaidia (amusement) が重視され、mass leisureとして市場経済の中に組み込まれることになった。

脱産業社会—「存在—自己開発」の生き方

「所有—消費」の生き方は、企業によって人工的につくられた欲望（ガルブレイスのいうところの依存効果）を充足し、また他人の誇示的、追従的な消費の影響（デューゼンベリーというところのデモンストレーション効果）を受けることであった。しかし人びとの欲望充足にこれで満足という落ち着きが出てこない。そこでこういう「所得—消費」の生き方、産業・経済第一主義に、1970年前後から反省が出てきたのである。いや、正しくは、自由と解放を求めた若者たちの1950年代のビート族のライフスタイル、1960年代のヒッピー族のシンプル・ライフが先行していたことが原因によ

り、1970年前後の大きな反省が生まれたとってよい。ローマ・クラブの「成長の限界」チャールズ・ライクの「緑色革命」シュマッハーの「スモール・イズ・ビューティフル」ミハエル・エンデの「モモ」スコット・バーンズの「家庭株式会社」エーリッヒ・フロムの「To have or To be (生きるということ)」日本の神谷美恵子の「生きがいについて」など、問題提起が次々と出されたのである。

これらの問題提起の最大公約数は、フロムのいうところの「所有価値to have」から「存在価値to be」への転換といってもよい。日本的な表現でいえば、「物の豊かさ」から「心の豊かさ」の追求へということである。欧米では、生活の人間化ということで、Quality Of Life/QOLをよく使う。「所有価値」の追求を基本的な生命と自由の範囲に抑制して、代って幸福の追求に関連する「存在価値」を重視すべきだということである。

自由時間の過ごし方は、anapausis、paidiaよりも、schole (leisure) にウェットをおくべきだということになる。scholeは「存在—自己開発self development」の生き方のこととってよい。そもそも、自己開発を意味するself developmentのdevelopは、「de (開く) +velp (封) の合成で、封を開いて手紙を取り出す意味である。転じて、その人本来の価値を引き出す、その人がその本来に向うということ、まさに、holy、whole、schole、school、なのである。もしも、今日の日本の人びとがこの意味を自覚し、それを望むならばタイム・バジェットからはscholeを実現することのできる状況を迎えているのである。

3 わが国が直面している課題

「前産業社会→産業社会→脱産業社会」という社会変化、「勤勉—節約」→「所有—消費」→「存在—自己開発」という生き方の変化「anapausis→paidia→schole」という自由時間の過ごし方の変化は、今日なお願望であって、社会のあり方も、人びとの生き方も、まだ3番目のステージに移っているわけではない。漸く、日本人の関心が、3番目のステージに向い出し、一部革新者といわれる人たちが、そのようなライフスタイルを選択し出したというところである。この変化をいかにすれば大きな流れとすることができるか。

いま国民一人ひとり、地方自治体、そして中央の政治・行政も、人生80年時代のライフスタイルのデザインと、その受け皿として社会のあり方に、これまでにない強い関心を寄せている。その意味では、いま、レジャーの本質に気づきと動機を与える好機である。しかし、ここでレジャー問題に関わっている人たちが、配慮しなければならないことは、レジャーの本質を手段としてではなく、目的として把握することである。レジャーは本来、文化の領域の問題であって、経済の領域の問題ではない。ところが、日本においては、経済の領域に位置づけ、内需拡大手段として位置づけている人が多い。それはあくまでも結果であって、レジャーは経済の価値をつくる手段ではない。

関係者の間に

経済の価値 > レジャー・文化の価値

ではなく

経済の価値 < レジャー・文化の価値

のコンセンサスをおくべきだと思う。ところが、内需拡大にとらわれ過ぎ、レジャー問題をハードウェア重視でとらえる傾向が強い。これは平成元年までの日本

のリゾート開発がよく物語っていた。自然環境のよいところに、いかに宿泊施設、娯楽・気晴し施設の都市型のハードウェアを建設するかに、関心が寄せられていたか。自然世界に都市的施設を持ち込んだのでは、holy、whole、scholeは遠のいてしまう。あくまで、ハードウェアはミニマムで、ソフトウェア重視のリゾート開発こそが望ましい。

バブル経済の崩壊で、リゾート環境整備が見直しを迫られているが、この環境整備はなん世代にもわたって行すべきことである。急ぐあまり、人間の生き方、レジャー・文化のあり方の本質から離れてはならない。

「労働時間短縮→自由時間の増大→受け皿としてのリゾート開発→内需拡大」が政治・行政、レジャーの関係者の関心事であってはならない。もちろん、レジャーがビジネスに関わってならないということではなく、それは結果でなければならないということである。これからのレジャー問題は、「所有—消費」、amusementの次元から、「存在—自己開発」、scholeの次元に、いかにして移行させるか、qualityを高めるかに向うべきなのだ。